

# 友の会通信

第23号

2014年3月15日(土)

葛飾図書館友の会

編集 広報委員会

発行責任者 中里 隆二

## と一緒に図書館でボランティア活動をしませんか

### 友の会委員会紹介 その1

### ナイトシアター委員会

ナイトシアター委員会は、原則として毎月第2土曜日の夜6時から8時ぐらいまで金町駅前にある葛飾区立中央図書館の会議室で図書館所蔵のDVDを上映しています。上映はすでに50回をこえました。上映作品の選定や広報、会場準備などナイトシアター委員会の活動を紹介します。

#### [定期上映会]

#### ① 上映チラシの作成及び配布

上映チラシを作成して、それを中央図書館を通して、区内の各図書館に配布してもらっています。チラシの内容は、上映作品の基本的なデータ、例えばタイトル、出演者、製作年、上映時間、みどころなどを載せています。また裏面には年間のスケジュールを記載しています。内容は盛りだくさんなので、是非お近くの図書館でご覧になっていただければと思います。

#### ② 関連書籍の準備及び展示

毎回上映作品に合わせた関連書籍を展示・貸出しています。原作本はもちろんのこと、原作者の他の作品や監督や俳優の本、はたまた舞台になった都市のガイドブックなども展示しています。DVDだけでは終わらず、他の資料にと繋げて総合的に楽しんでいただければと思います。

#### ③ 当日の会場準備

イス並べ(互い違いに並べる)・アンケートの準備(イスの上に置き、筆記具の準備)・DVDの試写(音量調整、画面の設定など)・会場案内の掲示(図書館入口から会議室1まで誘導する張り紙貼付)・会場内誘導(ライトを持って、遅れてきた人の案内など)・その他(BGMを流す、空調の調整など)を行っています。

#### [年間スケジュール決定とアンケート実施]

#### ① 上映作品の決定

一番楽しいところかもしれませんね。委員の皆さんから希望を聞き、各委員の上映したい作品、季節もの(クリスマスなら冬、戦争なら夏など)、上映時間(長いなら夏など)、バランス(洋画だけ、邦画だけとか、かたよらないようにする)などの点を鑑みて決定しています。ただ、図書館所蔵DVDの内、上映権付きDVD(家庭視聴用ではなく、特別に会場で上映できるような権利付きDVD)から選定するので、なかなか作品が少ないのが悩みです。また、図書館に購入してもらいたいDVDの希望を図書館に提出しています。その結果、購入していただいたDVDもあります。



### 「告知」第7回葛飾図書館友の会総会

4月26日(土)に開催

友の会も発足以来、今年で7年目の活動に突入します。第7回葛飾図書館友の会総会を左記の日程で開催しますので、会員の方々、また友の会活動にご興味・ご関心をお持ちの方は是非ご参加下さい。即日入会も可能です。詳しくはポスターやチラシ、ホームページなどお知らせします。

開催日時 平成26年4月26日(土)午後3時より  
開催場所 葛飾区立中央図書館 会議室1  
議題 平成25年度活動及び収支報告、役員改選、平成26年度活動計画案及び予算案など  
(なお、総会終了後、ライブラリーカフェの開催を予定しています)

## ② アンケートの取りまとめ

ナイトシアターでは毎回来場者の方にアンケートをお願いしています。少しずつ変更を加え、よりよい上映ができるようなアンケートを作っています。それを取りまとめ、次年度の活動にフィードバックしています。まだ小さい会なのですぐに改善できるのがよいところです。例えば、最初は上映の希望日や時間を聞いて、毎月第2土曜日18時からに決定しました。また、会場のイスの並べ方にアドバイスをいただき、改善いたしました。

アンケートに記載いただいた上映希望作品は、委員会の購入してもらいたいDVDリストにも含めて、図書館に提出しています。最後に、上映前のプレトークや他の委員会との合同のイベントなど、まだまだ委員会としてやれることがあると思います。是非、友の会に入会していただき、一緒に活動しましょう。



## 《今年も盛況！ 友の会主催・新春かるた大会》

昨年初めて行われた《図書館でのかるた大会》は大好評で、今年は中央図書館と立石図書館の2館で行われました。中央図書館は昨年と同じく友の会主催『郷土かるた』と『小倉百人一首』を1月3日に開催。立石図書館では館主催で『郷土かるた』のトーナメントが5日に開催されました。元気な子どもに腕に覚えのあるおとなも混ざり、それぞれ新春らしい明るい声に満ちた催しでした。

友の会では昨年と同じく実行委員会(鶴岡副会長)を立ち上げ、新しいプログラムを組んで実施。橋本中央図書館館長の挨拶ののち、午後2時から行われました。



『郷土かるた』は群馬県の『上毛かるた』が有名ですが、葛飾区でも地域の歴史や産業などの知識を学ぶよう、区内小学校では3年生になると全生徒に配布し、かるたを通じて郷土を知るよう努めています。美しい《切り絵》がカルタに彩りを添えるなか、楽しいカルタとりがスタートしました。

メインの『小倉百人一首』は《坊主めくり》から始まりました。各々のめくり札に「お姫様」の絵札が出ると、歓声が起こり、逆に「坊主」が来るとがっかりして持ち札が無くなるゲームです。つぎは百人一首の《ちらし取り》で実力を試し、一段落したところで《源平合戦》がスタートしました。CDによるスピーカーの読み上げで、勝負が開始。最後に勝ち残ったのはなんと双子の中学生兄弟。熱戦の末、お兄さんが勝利しました。聞けば最近の小中学校では百人一首は必修科目とか。来年もまた熱戦が繰り広げられることでしょう。実行委員会のメンバーも大忙し。図書館の皆さんの応援と賞品の提供を受けて今年も楽しく開催することができました。





# 葛飾って、田舎？ 下町？



葛飾区では「区民大学」「区立各図書館」「郷土と天文の博物館」「シニア活動支援センター」「消費生活センター」「東京理科大学」など、多くの機関や団体がいろいろな講座を開設して区民のための知的交流を深めています。今回は区民大学が開催した、かつしかを楽しむ『文芸から探る かつしか(全2回・有料)』という講座をルポしました。広報委員会ではこれまでの都内博物館などの探訪に加え、区内で開催される知的講演会の様子をお届けします。

[講師 谷口 栄さん(郷土と天文の博物館学芸員)]

この講演会は中央図書館で2月8日(土)と15日(土)の2回にわたって開かれましたが、なんと両日とも大雪に見舞われるという悪条件にもかかわらず、沢山の皆さんが参加し、熱心に聴講しました。“文芸から探る かつしか”という、図書館ファンにもってこいのテーマ。内容は万葉集、伊勢物語、更級日記などの古典作品や中世以降の紀行文、近代以降の文学作品などから葛飾の歴史風景を読み解き、その変容を探るというものでした。主催は郷土と天文の博物館、講師は郷土と天文の博物館学芸員谷口 栄さんです。谷口さんは葛飾生まれの葛飾育ちで、日本歴史学会会員であり、主に東京東部(東京下町)の歴史や文化を研究されています。

第1日は<かつしか>の地名を万葉集、和歌、物語などにみられる『別れ』『涙』に結びながら、歴史的には鎌倉時代に成立した『吾妻鑑』の記事と『曾我物語』を比較すると、後者の方が文学的な脚色が加わっており、例えば、葛西三郎が葛西六郎となっている、など。

第2日は江戸時代後期の旅行記や広重の版画を見ながら、大都会から訪れた旅人の見た《かつしか》の風景を読み解き、中川、江戸川を経て東北へ向かう船旅などの往還から、葛飾の田園風景が深い感慨を与えたことが話されました。明治、大正、昭和の文豪・幸田露伴、夏目漱石、大町桂月、永井荷風などの著名人が料亭『川甚』の柴又名物の川魚料理に舌鼓を打ったことが知られています。そこで、問題。いったい葛飾はいわゆる<田舎>か、それとも粋(いき)と人情で知られる、江戸、東京の<下町>なのかという疑問です。ふつう下町とは神田、日本橋、浅草をいうようですが、なぜか葛飾生まれの人は年齢の差もありますが、よくいうチャキチャキの下町ッ子とはいえないようで、なにか中途半端のようです。しかし葛飾区を代表する青木区長はいつも『下町の人情あふれる葛飾は…』などと話しています。この講演では、江戸・東京をつなぐ行政区分の変化や戦前戦後の風俗の変化から見て、江戸川を境とするよう、下町の範囲が拡大されているということでした。

葛飾の皆さん、いまや葛飾は下町文化の担い手です。寅さんのセリフを生かし、観光に、産業に、下町文化の花を咲かせようではありませんか。

(広報委員 高橋久郎・記)

## ●友の会ニュース 「友の会」かつしかボランティアまつりに参加

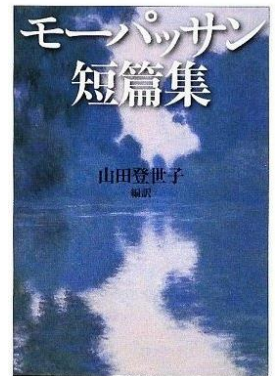
12月1日(日)堀切にあるウェルピアかつしかで開催された「第25回かつしかボランティアまつり」に友の会会員4名が総務部門のスタッフを担当しました。友の会は9月末からほぼ毎月開催された実行委員会に参加し、当日は午前・午後にわたり、1時間ごとに会場内の1階エレベーター前での来場者の対応や安全確保、問い合わせなどの役割を支障なく果たしました。

## ●友の会ニュース 「かつしかこどもの本フォーラム」を後援

区内のこどもの読書活動の視野を広げることやこの活動にかかわるボランティアのネットワークの拡大を目的として2005年より開催しているこのフォーラム。今年は2月11日(火・祝)に中央図書館で行われ、「友の会」は後援団体として参加しました。“絵本をいっしょに楽しもう!”をメインテーマとした今年のフォーラム。友の会の児童・YAサービス委員会の会員も午前中に行われたおはなし会や紙芝居、大道芸などに、午後は絵本作家の浜田桂子さんの記念講演に協力しました。また「かつしか郷土かるた」のパネルやおすすめ絵本の展示、読書・学校図書館など、区内でのボランティア活動などの紹介コーナーも開催。多くの親子がこのフォーラムを楽しんでいました。

本が好きだ。毎日頁を開いている。畢生の読書家ならば「読むことは生きること」とのたまうのだろうけれど、そこまでの域には到達できない身を恥じながら、日常から本が消滅してしまったら、目の疾患で本が読めなくなったら一と想像するのはほとんど恐怖に近い。私の視力は大層悪いので、本を読むのに必要な視力を維持するため目の酷使は自制している。あんなに好きだった映画も、TVも沙汰済み。映画は批評を読んで事足らし、TVはRADIOへチェンジと代償行為。美しい薔薇を愛でず、ドライ・フラワーで花の香気を語るのは詐術だろうから、残念ながら私は昨今の映画、TVの良き鑑賞者とは言えない。そこで尚のこと、乱読とそしられても、本にかじりつく仕儀と相成る。

「心にのこる私の一冊」一難問だとひとりごちる。ここまで生きてきた中で、魂がうち震えた本との邂逅は枚挙に暇がないからだ。だからこそ「わたしの一冊」と訊かれ、限定するのははなはだ困難。若い時分には才気縦横、ブリリアントな作品に魅了された。方法の実験、心理の綾を良しとし、しみじみとした情感に身をゆだねるよりは、光彩陸離たる文章に吐息をついた。が、老年にさしかかった現在、作品の選定も、若年のみぎりとは異質の、大きくゆるやかなカーブを描いていることは否めない。しかしその反面、以前に読んだ作品に格別の感慨を覚えることも多々ある。「首飾り」もそのような一篇。作者たるモーパッサンの長篇には呆然とさせられるが、短篇は鋭い筆致で肺腑をえぐる。紙幅が僅かなので筋立て、種明かしはさし控え、各自がページを開いて下さることを切に希望する。私自身も昔日とは異なった訳本で読み直した。虚栄心がもたらした人生の酷薄さ。虚飾の対価。いにしへの私には理解できなかった行間に、ゆくりなくも歳月の経過を覚えたと嘆じよう。「首飾り」は人生の苦さを放つ作品。「心にのこる私の一冊」である。



(にしむら・きくこ 友の会会員)

## 「葛飾図書館友の会」で一緒に活動しませんか！

『友の会』は多くの会員によって活動しています。図書館を利用されている方、活動趣旨に賛同される方々、是非ご入会いただいて、あなたの図書館に関わるいろいろなアイデアを少しずつ実現してみませんか？

原則として第3土曜日の午後1時から4時まで中央図書館内で、また友の会総会や開催イベント時でも直接の入会受付を行っていますので、是非ご利用ください。年会費は一般会員 1,000 円、賛助会員は1口 2,000 円です。上記の方法が利用できない場合、入会希望者は中央図書館に入会届をご提出の上、年会費を下記の口座に納入してください。図書館での年会費の直接納入はできません。「通信欄」に一般あるいは賛助会員かを明記の上、26年度年会費とご記入下さい。また1口

ゆうちょ銀行 □座番号 00100-7-392065  
□座名称 葛飾図書館友の会

500 円の寄付も大歓迎です。払込手数料は窓口では130円、ATMからでは80円です。恐れ入りますが、ご負担をお願いいたします。入会届はHP (<http://katsutomo.jimdo.com/>) からダウンロードできます。

●問い合わせ先 中央図書館友の会担当者(打越さん、吉村さん、白井さん、川井さん) Tel 03-3607-9201

パソコンやスマホで書籍を読む人が増えた。電子化されて、紙の書籍はなくなるなどと言う人もいるけれど、本をめくる喜びは、スマホの画面に指をすべらすことで代替できるものじゃない▼家人は、電子書籍で出版されているものはそちらで購入しようとするが、私はやっぱり紙が好きだ。タブレットで電子書籍を読めば、外出先で鞆は軽いだろう。家の中に本があふれる事もない。指でなぞれば、文字がすぐ大きくなり老眼にも優しい▼なのに、やっぱり紙の本で読みたい。アマゾンやネットの書評で読みたい本を見つけ、検索するまでは電子の世界に頼るけれど、最終的には紙の本を図書館で借りるか、書店で購入して読む。なぜ紙の本にこれほど執着するのか不思議だった▼先日おそまきながらマクルーハンのメディア論を読んだ。そこでは紙に反射して眼に入ってくる光は左脳に作用し分析・批判モードになる。ブラウン管やモニターからの光は右脳に作用しゆったりしたパターン認識モードの透過光である。つまり反射光は目がカメラレンズになり、透過光は目がスクリーンになると分析されていた▼パソコン画面でさんざん確認したのに、印刷してみたらいっぱいミスがあったという経験を持つ人は多いはず▼つまり、同じ文字なのに紙とモニターでは私たちの脳の反応が異なるというところらしい▼紙の本を読む喜びというのもしかんなところから来るのかなと納得。

(矢野広報副委員長)

色えんぴつ